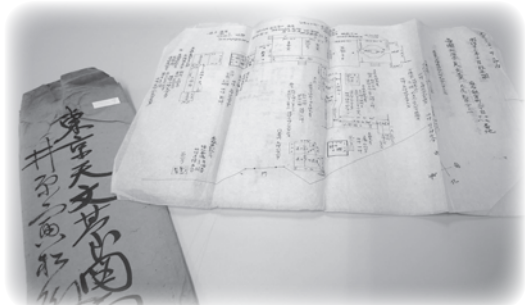
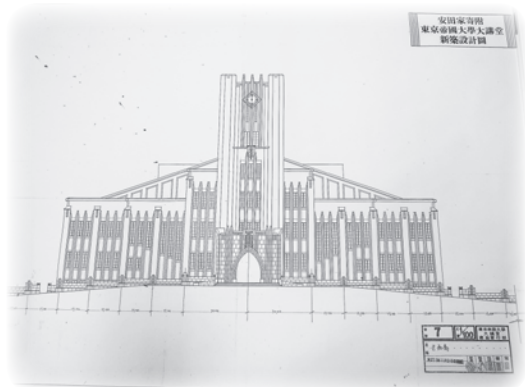


東京大学史史料室ニュース

第48号 2012・3・31

目次

渡邊洪基初代帝国大学総長の施策について—『帝国大学年報』を手がかりに—…………… 2
 「巽軒日記」の一部翻刻・刊行に寄せて…………… 4
 受贈図書一覧…………… 6
 史料室日誌抄録…………… 8



所蔵史料の紹介

これらは、資産管理部資産課より、2011年7月と11月に弊室に提供された本学関係施設の明治から昭和期の設計図面等の一部である。近年、第一高等中学校の建築仕様書や設計図面等が高額と評価されるなど、設計図面等は学術資源として価値あるものと認められている。弊室では、これら貴重な設計図面等を将来的にデジタル化していきたいと考えている。

渡邊洪基初代帝国大学総長の施策について —『帝国大学年報』を手がかりに—

谷本宗生

帝国大学の初代総長は誰か？という問いに、容易に「渡邊洪基」（わたなべ・ひろもと）と答えることができるだろうか。私立学校などならば、建学の祖にあたる位置付けであろう。帝国大学をはじめ、明治国家のプランナーとして活躍した渡邊洪基の知名度は、残念ながら高くはないと思われる。渡邊洪基（1847～1901年）は、初代帝国大学総長（1886～1890年）を務めた人物である。『渡邊洪基史料目録』（東京大学史料室、2005年）によると、次のような略歴である。開成所や慶応義塾で学んだ渡邊は、法制や外交などで諸条例・法規の制定改定に尽力する。1871年には、特命全権大使随員として欧州派遣される。元老院議員、工部少輔、東京府知事などを経て、1886年3月、帝国大学の初代総長となる。1890年5月、任特命全権公使。1893年、帰国して衆議院議員に当選。1897年、貴族院議員に勅選。1900年、立憲政友会の創立に参加。1901年5月、病没。東京帝国大学名誉教授。国家学会や東京地学協会など多くの学術・社交団体の役職を兼ね、三十六会長の異名をとる。渡邊の行政能力の高さ、関係する人脈の幅広さをうかがう経歴である。



渡邊 洪基

大学史家の中野実は、「東京府知事の渡邊洪基が初代総長に就任した。…東京大学教職員以外の行政官僚が、総長（総理）に就任したのは渡邊洪基を措いてほかにいない。彼は最初で最後の異色の総長であった。

…彼は孤軍奮闘に近い状態だったのかもしれない。五年間〔4年2ヵ月〕の彼の事蹟、起こった出来事を数えると、草創期の帝大の「父」とも「母」とも呼ばれていい。しかし伊藤〔博文〕、森〔有礼〕の影に隠され、彼に対する関心は低い」（『東京大学物語 まだ君が若かったころ』1999年）と指摘している。中野の指摘にあるとおり、近代日本大学史にとって帝国大学の成立は画期であるため、森有礼文相のリーダーシップによる「帝国大学令」（1886年3月）に基づいて、帝国大学が設立されたことを強調する研究傾向がみられる。ようやく近年に至って、政治思想史の瀧井一博（国際日本文化研究センター）や学生寄宿舎史の富岡勝（近畿大学）などが、渡邊初代総長の果たした役割に注目する研究を始めている。

渡邊洪基初代帝国大学総長は、実際にどのような施策を行ったのであろうか。不思議なことに、従前の東京大学史でも渡邊初代総長の具体的な施策や帝国大学内の整備過程については、いまだ十分に解明されていない状況である。帝国大学成立史研究とも絡み、今後の重要な研究課題といえる。今回は、帝国大学が定期的に作成し、文部省側に提出した『帝国大学年報』を手がかりに、従前周知されていない渡邊初代帝国大学総長の施策を取り上げてみたい。『帝国大学年報』は、現在東京大学総合図書館に「東京帝国大学五十年史料」として収められているが、東京大学史料研究会が「史料叢書東京大学史」として『東京大学年報』（東京大学出版会）の形で復刻しており、史料集として活用が容易である。渡邊洪基が帝国大学総長としてかかわるものは、『帝国大学第一年報』（明治19年）、『帝国大学第二年報』（明治20年）、『帝国大学第三年報』（明治21年）、『帝国大学第四年報』（明治22年）、『帝国大学第五年報』（明治23年）である。

文部大臣の命をうけ、帝国大学を総轄するのが帝国大学総長としての職責であるが、文部大臣や文部省からの指示を肅々と履行する（上意下達）という役目ではないかと先入観で捉えることはできない。「帝国大学令」第6条にもあるとおり、次のような役割などがあり、総長の果たした職務はきわめて重要であろうと思われる。①帝国大学の秩序保持 ②大学の状況監視・改良点の見出し ③評議会の議長 ④文部大臣への報告。

『帝国大学第二年報』（明治20年）には、1887年7月に行われた卒業証書授与式での渡邊の総長演説が記

されている。「修学ノ便ヲ与ヘンカ為メニ寄宿舎ヲ起シ本学年中既ニ上級ノ学生ヲシテ寄宿セシム来学年ニ於テハ悉皆入舎セシムヘキノ計画ナリ又帝国大学運動会ヲ保護シテ学生ノ身神ヲ活発ナラシムル等ノ事アリ又本学年ノ施設ニ係リ最モ好結果ヲ得タルハ昨年ノ改革ニ於テ官費生ヲ廃シ其他種々経費上ノ節約アリシカ為メ学生ニ志望アリ又需要アルモ学資継カス為メニ前途ノ支障ヲ生セントスルノ感アリ是ニ於テ官私ニ移文ヲ出シ奨学ノ貸費ト予メ就役ヲ約セル貸費トノ二種ヲ勧誘セシニ幸ニ諸方ノ賛成ヲ得」。

『帝国大学第三年報』(明治21年)にも、1888年7月の卒業証書授与式での渡邊の総長演説が記されている。「学生ノ健康保護及品行監督ニ就キテ新設シタル事項ハ本学ニ衛生委員ヲ置キ医科大学長ヲ以テ委員長ト為シ土地家屋飲水及学生ノ健康ニ関スル事ヲ注意シ其改良ヲ計画セシメ且ツ学生ニシテ不必要ノ借財ヲ為ス者ハ品行不良ニ属スル過失トシテ之ヲ処分スヘキコトニ定メタル等ナリ…図書館寄宿舎医院ハ夜間点燈ヲ要シ石油ヲ以テ光料ト為スカ故ニ失火ノ虞ナキヲ保セス電気燈ヲ以テ之ニ代ヘント欲シ其設計ニ着手セリ」。

上記にあるとおり、渡邊総長は次々と帝国大学の整備・改革のための方策を検討実施している。学生の心身を活発にさせる帝国大学運動会(1886年7月)を保護し、土地家屋飲水及び学生の健康に関することへの注意喚起と改良を計画する帝国大学衛生委員(1887年9月)を設置する。また官公庁や民間企業などに宛て、分科大学生の貸費勧誘と大学院生の優遇・助成を要望(1886年5月)している。帝国大学が国会・社会にとって実際に有用であることを、分科大学及び大学院学生への学資支援の要請といった形で表明したのである。そのいっぽうで、不必要な借財を行うなどの帝国大学生に対しては品行不良の過失として処罰する(1887年10月)としている。

火災失火を危惧して、学内の電気灯への代替化が渡邊の就任時から企画されたが、不幸にも1889年1月に大学寄宿舎で死傷者を出す火災事件が生じる。それを受けて、同年2月初めには、防火心得を渡邊総長は速やかに発している。「本学内各室ニ於テ石油ランプヲ用フルコトヲ禁ス」「各室ニ於テ火鉢煙草盆ヲ用フルコトヲ禁ス」(『帝国大学第四年報』)。学内での火災失火を防ぐ措置をより徹底させようという狙いである。施策を徹底させる必要もあれば、施策によっては現実に即して調整・修正することも、帝国大学責任者としての総長にはもとめられたといえる。たとえば、大学の寄宿舎制度は学生の悉皆入舎を目標として掲げたが、公認寄宿所(1886年9月)を活用するなどして、1888年11月には入舎を希望限定とする。1887年12月末調べによると、寄宿舎生211人、公認寄宿所生103人、自宅・父兄宅の通学生251人。1888年11月

20日の帝国大学評議会では、「必ス入舎ナスヘキノ制規ナリシカ実際ノ経験ニ徴シ且ツ将来ノ便益ヲ謀リ審議ヲ経テ自今学生ノ望ニ応シ入舎セシムルコトニ改ムルノ件ヲ議シ之ヲ可決ス」(『帝国大学第三年報』)と示されている。現実の様相をできる限り冷静に把握し、望ましい方向を模索検討していこうとする、帝国大学の指導・責任者としての姿勢は重要である。1889年1月、文部省が15年計画で官立学校授業料を3.3倍(帝国大学は年間100円)に引き上げる計画を打ち出したことに対しても、同年4月16日の帝国大学評議会で「今日ノ実況ヲ斟酌スルニ或ハ予定ノ授業料金額ハ多キニ過キサルカ否ニ就キ文部大臣ノ諮詢アルヲ以テ之ヲ議シ授業料ハ現今ノ金額ニ据置キ追加セサルヲ以テ可トスルコトニ決ス」(『帝国大学第四年報』)と、帝国大学としての意思を明示している。

『帝国大学第四年報』(明治22年)には、帝国大学文書取扱規程(1889年4月)が記されている。「第一 本学ニ到達スル文書ハ凡テ書記官室往復主任ニ於テ接受シ之ヲ開封シ件名番号等ヲ簿冊ニ記入シ書記官ノ査閲ニ供スヘシ」「第二 書記官ハ其文書ヲ査閲シ事例規ナキカ又ハ重要ナリト認ムルモノハ之ヲ総長ノ閱ニ供シ其他尋常ノ件ハ主務ノ処ヲ指示シ之ニ検印シテ往復主任ニ交付シ之レヲ配布スヘシ」「第十二 処分完結ノ文書ハ記録主任ニ於テ之ヲ類別彙纂シテ簿冊トナシ書記官之ヲ保管シ他日ノ参照ニ便ナラシムベシ」。120年以上を経て、現在の公文書管理にも相通じる点があると思われる。書記官は、帝国大学文書取扱の統轄責任者であり、文部大臣に報告する帝国大学評議会の議事顛末を筆記する重責も担う存在である。渡邊総長下の帝国大学文書の多くには、書記官の「永井」という印や署名が残されている。総長の側近として書記官(1886年3月～1889年4月)を務めたのは、永井久一郎という人物である。慶応義塾などで学び、名古屋藩の大学南校貢進生となり、藩命で米国に留学している。工部省や内務省などを経て、帝国大学書記官となる。文部大臣秘書官として、4大臣に歴仕する。退官後、日本郵船横浜支店長などを務めている。作家永井荷風の父であり、漢詩を好みその造詣も深いといわれる。永井書記官らを介して現在も残されている渡邊総長下の帝国大学文書は、近代日本大学史を紐とく貴重な記録である。得られた手がかりから、関係する歴史公文書や総長関係資料などを駆使して、今後さらに考察分析を深めていかなければならない。大学史研究の継続した蓄積が、将来的に編纂される東京大学百五十年史、二百年史の礎にもなっていくものと考えている。

(たにもと むねお：大学史史料室)

はじめに

東京大学史料室では、今年度の史料室における作業成果の一環として、井上哲次郎の日記である「巽軒日記」（「巽軒」は井上の号）の一部を翻刻し刊行しました。かつて『東京大学百年史』（1984～87年、全10巻）が編纂された際、当史料室の前身である東京大学百年史編集室には東京大学に関係の深い著名な人物の個人資料が寄贈・寄託されましたが、「巽軒日記」もそのひとつにあたります。

教育勅語の解説書として権威を持つ『勅語衍義』の執筆者として、また「教育と宗教の衝突」論争の提起者として、さらには明治末年の国民道徳論の提唱者として、「文字通り天皇制イデオロギーの正統解説者の位置を占めていた」（森川輝紀『国民道徳論の道』）と評される井上哲次郎、その彼がおよそ半世紀にわたって記し続けた日記が史料室に保管されています。近代日本の教育・哲学・宗教など多方面に及ぼした井上の影響の大きさからすれば、この日記はもっと注目され、活用されてもよさそうですが、残念ながら年間を通してほとんど利用者がみられないのが現状です。このたびの翻刻を機会として、本史料への関心が高まることを願ってやみません。

今回は史料室に保管されている日記のうち、明治30年代の部分について翻刻を試みました。以下では、「巽軒日記」及び井上哲次郎についての簡単な紹介を行い、刊行のご案内とさせていただきます。

井上哲次郎の生涯と日記

井上哲次郎は、安政2（1855）年の誕生から昭和19（1944）年の死去まで、日本でいわゆる「近代」と呼ばれる幕末・明治・大正・昭和前期のほぼすべてを生きた人物です。また明治15（1882）年に東京大学文学部の助教授となってからは、大正12（1923）年に69歳で退職するまで本学に奉職し、先述した代表的な事跡で知られるほか、退職後も大東文化学院総長や哲学会長を務めるなど、近代日本のアカデミズムを支える一つの勢力として影響力を持ちました。

井上に関わった種々の事件・問題についての歴史的考察や、井上自身の哲学・思想に関する分析的検討はすでに多くの蓄積をみっていますが、井上が著した著書や論文ほどには、日記の注目度は高くないように思わ

れます。その理由への考察は後述するとして、ここではまず日記の全体像を確認しておきましょう。

井上哲次郎の日記のうち現存するものは89冊、そのうち84冊を当史料室が保管しています。89冊のうち時期的に最も早い2冊は「懷中雑記」と表題され、東京都立中央図書館井上文庫に収蔵されています。これは井上のドイツ留学期（明治17～23年）と帰国後の1年10ヶ月についての記録で、『東京大学史紀要』第11号・第12号（1993・94年）で福井純子氏によって翻刻・解説されました。

「懷中雑記」に続く日記は明治26（1893）年7月27日の記述から始まりますが、第一冊目（26.7.27～29.11.11）は記録のない日も多く、空白はメモ書きに使用され、雑記帳的色彩の強いものでした。明治33（1900）年から始まる2冊目以降が、本格的な巽軒日記の始まりとあってよいでしょう。ここからは、記述が空白の日はほとんどなくなり、一日あたりの記述の分量も年を追って増加していきます。当初は一年一冊として綴じられていたものが、紙数の増大に伴って明治42（1909）年以降は上半期下半期の二分冊でまとめられるようになりました（昭和8年下半期以降は和紙の不足もありノートに変更）。日記は井上死去（昭和19年12月7日）の直前である12月5日まで書き続けられ、その期間は半世紀を超えました。

この「巽軒日記」としてまとめられた87冊のうち、大正11（1922）年の全体及び翌12（1923）年上半期の計3冊については、文京区立小石川図書館に寄贈され、その後文京ふるさと歴史館へ移管されました。当史料室ではその複写を保管しています。また戦災による焼失等が原因で現存しない冊子も一部ありますが、これだけ長期にわたる個人の日記が比較的状态も良く保存されていることは大変貴重で、学者井上哲次郎の日常を窺い知ることのできる格好の資料といえるでしょう。

「巽軒日記」の記述

次に、記述内容からみた「巽軒日記」の特徴について紹介します。「巽軒日記」の特徴のひとつとしては、極めて長期にわたる個人的な記録であるにもかかわらず、一貫した方針のもとに執筆され、微細な点を除けば記述のブレがほとんどみられないことが挙げられま

す。「異軒日記」に記載されているのは、日々の来訪者名、書状の往復における差出人・送付先、井上自身の活動、読書中の書名、その他社会的イベント等、が中心です。わかりやすく一例を挙げてみましょう。以下は明治33年4月24日の記述です。

廿四日、藤島了穩、中山再次郎、旭野慧憲、坂口昂来訪す、○午前京都大学を訪ひ、森春吉、中川元、大西祝、島文次郎に邂逅す、○午后高等学校に於て「宗教の話」を演述す、○不在中千賀鶴太郎、吉見資胤来訪す、○夜、姉崎母子来訪す、

このように、上述した事項を中心に日々の出来事が極めて簡潔に、感情を交えずに記述されています。こうした淡白な記述も、「異軒日記」の大きな特徴として数えられるでしょう。思うに井上は、この日記について、将来の公開も念頭に置いた「史料」としての位置付けを考えていたようです。第1冊目（明治26～29年）の後半部は空白部分がメモ書きとして利用されていますが、そのなかに次のような一節があります。

◎兎に角此書ハ後日の史料となるべき事。単に便利なりといふのみならず

断片的に記されたもので、前後に関連する文脈がないため断定はできませんが、「此書」とはそのとき書き込んでいた「異軒日記」そのものを指している可能性が高いと思われます。自身の日常を克明に、しかし主観を交えずに記録しておくことが、「異軒日記」をつけるにあたって揺らぐことのない井上の方針であったといえます。

「異軒日記」活用の可能性

とはいえ、このような淡白な事項の羅列は、一般に「日記」という史料に期待する内容からすれば物足りないところもあります。「異軒日記」があまり活用されていない現状には、日記としての魅力不足もあるのかもしれません。しかし、日々の来訪者や来簡の記録を具に見ていけば、井上を取り巻く人々にも時期毎に顕著な変化が見られることを気づかせます。また、井上自身がどの時期にどのような会合に出席していたか、あるいは読書の傾向など、この日記からはじめて明らかになる事実も多くあることでしょう。

本史料を積極的に活用した近年の研究としては、真田治子氏「明治24年版『改正増補 哲学字彙』の可能性」（『埼玉学園大学紀要 人間学部編』9、2009年）

が挙げられます。真田氏の研究では、明治期の学術用語集である『哲学字彙』が改訂される過程を解明する手がかりとして、「異軒日記」が活用されました。日記の記述から、井上が「哲学字彙の会」を断続的に開催していたことが明らかになり、またその開催日程の詳細が確認されたことも、問題解明への大きな手がかりとなったようです。

おわりに

「異軒日記」の活用法をめぐっては様々な可能性が考えられるでしょうが、一方でこの日記の存在に対する認知度の低さや当史料室の利用の不便さも、「異軒日記」の積極的な活用を妨げる要因のひとつであったかもしれません。もちろん、従来まったく周知されていなかったわけではなく、当史料室に日記を中心とする井上哲次郎史料が保管されていることは、「東京大学史料目録」シリーズの3冊目として発行された『加藤弘之史料目録・井上哲次郎史料目録』でも紹介・解説されていますし、関臯作編『井上博士と基督教徒』（みすず書房、1988年）の刊行に際しては中野実「井上哲次郎の日記について（一）」「同（二）」が月報『みすずリプリント』に掲載されました。また近年では『近現代日本人物史料情報辞典2』（吉川弘文館、2005年）で井上哲次郎の項目を執筆した真辺将之氏によって、当史料室所蔵分を含めた井上哲次郎関係史料の所在が紹介されています。

しかし、日記の存在は知っていても、わざわざ史料室まで足を運んで閲覧するには至らないという人も多くおられたのではないのでしょうか。今回の翻刻は「異軒日記」のうちでもごく一部に過ぎませんが、これをひとつの契機として「異軒日記」活用の機運が高まれば、翻刻を担当した者としてこれに代わる喜びはありません。

（だいま としゆき：大学史料室教務補佐員）



今回翻刻した異軒日記

受贈図書一覧（抄）（平成23年8月～平成24年1月）

Aoyama Gakuin Archives Letter －青山学院資料センターだより－ 第5号 谷本宗生	平成23年11月	旧制中等諸学校の『校友会誌』にみる学校文化の諸相の研究と史料のデータベース化（科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書（第一集）） 谷本宗生	平成23年10月
同窓会通信 第7号, 第8号 一高同窓会	平成23年9月, 12月	D J I レポート No. 77, No. 82+ 83, No. 86+ 87 小川千代子（国際資料研究所）	平成21, 22, 23年9月
大阪大学文書館設置準備室だより 第9号 大阪大学文書館設置準備室	平成23年9月	校史 Vol. 21 國學院大學研究開発推進機構 校史・学術資産研究センター	平成23年3月
大阪市立大学史紀要 第4号 大阪市立大学大学史資料室	平成23年10月	信濃国松代真田家文書目録（その12・完） 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館	平成22年3月
霞城館だより No. 52, 53 財団法人霞城館	平成23年7月, 平成24年1月	アーカイブズ 第45号 独立行政法人国立公文書館	平成23年11月
大学アーカイブズ No. 45 全国大学史資料協議会東日本部会	平成23年11月	青淵 第七四九号～第七五五号 財団法人渋沢栄一記念財団	平成23年8月～平成24年2月
金沢大学資料館図録 平成20, 22, 23年度 金沢大学資料館	平成20, 22, 23年10月	渋沢研究 第24号 渋沢史料館	平成24年1月
九州大学 百年史 写真集 九州大学大学文書館	平成23年5月	TEXNH MAKPA 第3号 女子美術大学歴史資料室	平成24年1月
九州大学大学文書館ニュース 第36号 九州大学大学文書館	平成23年12月	成蹊学園史料館年報 2010年度通号9号 谷本宗生	平成23年7月
旧制高等学校記念館だより 第55号 谷本宗生	平成23年7月	1880年代教育史研究会ニューズレター 第34号, 第35号 谷本宗生	平成23年7月, 10月
京都大学大学文書館だより 第21号 京都大学大学文書館	平成23年10月	一八八〇年代教育史研究年報 第三号 一八八〇年代教育史研究会	平成23年10月
京都大学の歴史 第二版 京都大学大学文書館	平成23年3月	大学史研究通信 第67号, 第68号 谷本宗生	平成23年9月, 10月
熊本大学60年史 写真集 国立大学法人 熊本大学	平成23年10月	大東文化歴史資料館だより 第11号 谷本宗生	平成23年11月
慶應義塾福澤研究センター通信 第15号 慶應義塾福澤研究センター	平成23年10月	玉川大学教育博物館 館報 第9号 玉川大学教育博物館	平成23年8月
学院史料 第二十五号 神戸女学院史料室	平成23年11月	東海大学学園史ニュース No. 6 東海大学学園史資料センター	平成23年11月
國學院大學伝統文化リサーチセンター史料館特別展図録平成二十三年度 まつりの継承－季節のまつりとその担い手－ 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	平成23年11月	中央大学創立125周年記念展示目録 学びのたから 中央大学の起源・絆・記憶 中央大学入学センター事務部大学史編纂課	平成23年6月

東京古典会 創立100周年記念誌 東京古典会	平成23年10月	駒場農学校英人化学教師エドワード・キンチ 熊澤恵里子（東京農業大学）	平成23年9月
女子美術大学創立110周年記念事業シンポジウム「現代アジアの女性作家」報告書 谷本宗生	平成23年5月	写真で見る松平康荘の英国農学修行関係史料 熊澤恵里子（東京農業大学）	平成23年10月
信綱と「言の葉の道」－誕生から『日本歌学全書』刊行前後－ 佐佐木信綱記念館	平成23年11月	本（明治国家をつくったひとびと23, 24） 瀧井一博（国際日本文化研究センター）	平成23年6月, 7月
江戸東京博物館NEWS vol. 75, vol. 76 東京都江戸東京博物館	平成23年9月, 12月	渡辺洪基と国家学会 瀧井一博（国際日本文化研究センター）	平成19年5月
東北大学史料館だより 第15号 東北大学史料館	平成23年9月	渡辺洪基－日本のアルトホーフー 瀧井一博（国際日本文化研究センター）	平成18年3月
獨協中学・高等学校 獨協祭展示要約集 2009年～2011年, 平成23年度 獨協祭参加記録 櫻田可人（獨協同窓会）	平成21, 22年10月, 平成23年9月	シリーズ 新自由主義時代の博物館と文化財 公文書管理法の問題点－国立大学法人の立場から－ 谷本宗生	平成23年12月
日本女子大学史資料集 第五－（三） 日本女子大学校規則〔明治四三－大正三年〕 谷本宗生	平成23年3月	「ブックレビュー・セミナー」の試み －教職課程の学生にどのような本を推薦したらよいか－ 谷本宗生	平成23年9月
大学史編纂課だより 第2号 日本大学広報部大学史編纂課	平成23年9月	遊学日記（CD-R, TIFF形式） 谷本宗生	平成23年10月
日本大学のあゆみ 第三巻 日本大学広報部大学史編纂課	平成23年8月	学環学府 34 東京大学大学院情報学環・学際情報学府	平成23年10月
野間教育研究所紀要 第50集 財団法人野間教育研究所	平成23年9月	赤門学友会報懐徳 21号 谷本宗生	平成23年10月
佛教大学 総合案内2011 佛教大学総務部広報課	平成23年7月	東京大学法学部 研究・教育年報21 東京大学法学部	平成23年10月
B-ism No. 2, No. 3 佛教大学総務部広報課	平成23年6月, 12月	U P 466号～471号 財団法人東京大学出版会	平成23年8月～平成24年1月
宮城学院資料室年報一信・望・愛－ 第17号 宮城学院資料室	平成23年3月	JANU vol. 22 本部広報課より提供	平成23年11月
開港のひろば 第113号, 第114号, 第115号 横浜開港資料館	平成23年7月, 10月, 平成24年2月	学内広報 No. 1414～No. 1421 本部広報課より提供	平成23年7月～平成24年1月
立命館大学国際平和ミュージアムだより VOL. 19 - 2 立命館大学国際平和ミュージアム	平成23年12月	法学部卒業記念写真帖 昭和五年三月 平成23年度購入	昭和5年3月
2011年特別企画展「中国との戦争と戦没学生」解説書 わだつみのこえ記念館	平成23年10月	近代日本教育関係法令体系 平成23年度購入	平成21年9月
明治初期のお雇い独逸人教師G.A.グレーフェンの足跡 小澤健志	平成23年秋		

史料室日誌抄録（平成23年8月～平成24年1月）

- 8月5日（月） 西村幸夫キャンパス計画室長視察助言のため来室。
8月23日（火） 吉見室長、総務課長、総務副課長との打合せ（史料室）。
8月29日（月）～11月16日（水）
本部棟1階展示・教育学部へ卒業写真帳貸出し。
9月7日（水） データベース科学研究費申請の打合せ（史料室）。
9月16日（金） 第5回大学史料収集・管理の在り方に関するWG開催（本部棟会議室）。
10月1日（土）～10月2日（金）
小川室員、大間室員、大学史研究調査のため出張（京都大学）。
10月14日（金） データベース科学研究費申請の打合せ（史料室）。
10月31日（月） 谷本室員、小川室員、吉見室長職員講演会出席（本部棟）。
11月18日（金） 小川室員、国際資料研究所セミナー参加（松本大学）。
11月22日（火） 『東京大学史史料室ニュース』第47号刊行、発送。
11月26日（土） 谷本室員、村上室員、研究者資料のアーカイブズシンポジウム参加（福武ホール）。
11月28日（月） 資産課より、旧蔵資料（図面等）受取り。
12月6日（火）～12月9日（金）
大学総合教育研究センターへ写真帳数点貸出し。
12月15日（木） 第4回大学史史料室室員会議開催（史料室）。
12月21日（水） 谷本室員、小川室員、大間室員、村上室員、避難訓練参加（山上会館）。
12月27日（火） 国立公文書館専門官視察助言のため来室。
1月11日（水） 経済学部資料室小島浩之先生視察助言のため来室。
1月18日（水） 谷本室員、小川室員、大間室員、村上室員、経済学部資料室見学。
1月23日（月）、30日（月）
総合図書館職員見学のため来室。
8月～1月 月1～2回、国際資料研究所小川千代子先生との打合せ（史料室）。

この間の閲覧者数

学内者 10名
学外者 13名

主な学外閲覧者所属機関

国際日本文化研究センター、中央大学、東京工業大学、東北大学史料館、獨協同窓会、日本大学

その他

文献撮影・複写許可件数 17件
調査（照会）件数 50件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第48号

発行日：2012年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077(直)

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉県稲毛区六方町13-2